

## 油彩

(テンペラ併用) カトレアのある静物を描く①

## 三浦明範の静物画講座

みづらあきのり 1953秋田 東北芸術大卒 文化庁主催現代美術展、セントラル美術館  
 油絵大賞展、昭和会展、安井賞展、具象絵画ビエンナーレ、日本の絵画新世代展、両洋の眼現  
 代の絵画展、21世紀の旗手展などに出品 文化庁芸術家在外研修員としてベルギーに滞在(96  
 ~97) 春陽会会員

## ■ものを見る(1)

私たちが「ものを見る」ということは、太陽光線を反射した光を見ていることです。

たとえば、「赤い」物体は、赤い光のみ反射し、それ以外の光をその物体が吸収しているのです。同様に、「黒い」ものはすべての光を吸収しています。すなわち、7色の光がそこにあるのです。陰影の部分に単純に「黒」を塗っても、穴があいているようにしか見えないうのは、その吸収された光の色を表現していないからなのです。

この陰影の表現こそ、絵画の変遷であったと言っても過言ではないうでしょう。たとえば、印象派の画家たちは、「光の画家」と言われていますが、実は、この陰影に含まれる色彩を分解して見せたとも言え換えられるのです。

## ■混色(1)

自然の色彩を表現しようとする

と、チューブから出したままの色では、満足できないはずですが。そこで、「混色」をすることになります。これは3つの方法があります。

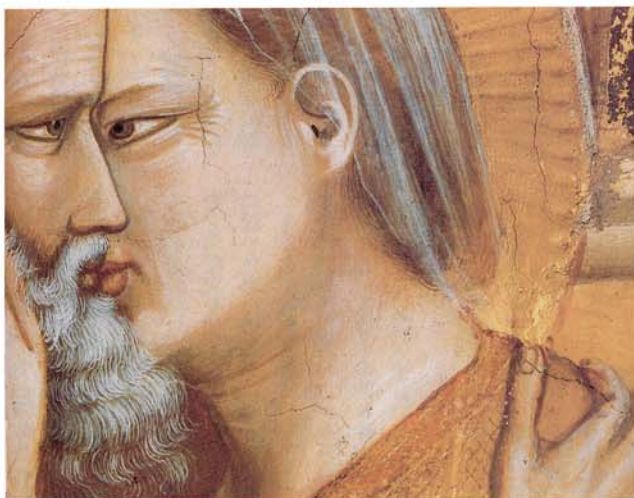
その第一は、当然ですが、パレット上で絵具を混ぜること。この方法では、直接混ぜた効果を確認できるので、彩度、明度は確実に低下してしまいます。これを防ぐために、古来、いろいろな手段を考えてきました。

その一つが視覚混色といって、複数の色を画面上に並列して置き、離れて見ると網膜上で、あたかも絵具を混ぜたかのような効果を表す方法です。これは、カラーテレビのモニターを拡大してみると、細かい3原色の点に分かれていることと同じ原理です。ジョルジュ・スーラなど、新印象派と呼ばれている点描法の画家たちは、これを最大限に応用したのです。

そして、最も古くから行われてきた方法が、塗り重ねによる混色



ジョルジュ・スーラ「ポール・アン・メッサンの外港 引き潮」部分  
 複数の色彩を点描してある。離れて見ると混色効果が得られる。



ジョット スクロヴェーニ礼拝堂「黄金門での再会」部分  
 陰影の部分を見ると、下層にテール・ヴェルトが置かれているのがわかる。



ファン・アイク「神秘の子羊」ヨース・ヴェイト部分  
赤の暗部の下には、ラピスラズリ（ウルトラマリン）が塗られている。



パウル・リューベンス「ロマンとサビーヌの和解」部分  
背景や馬の部分は、有色下地の層が透けて見えている。

です。これは、(半)透明なフィルムを重ねることで、混色効果を得るものです。

14世紀イタリアのチェンニノ・チェンニニはジョットの技法を残していますが、その中で、人物の肌色を描く方法として、最初に緑土(テール・ヴェルト)を塗るとしています。これは、肌の陰の部分の、緑味がかった灰色調子を表現するための工夫なのです。

また、ファン・アイクの例では、赤い衣の表現が、下に朱(ヴァーミリオン)を置き、その上の暗部に青味として、ラピスラズリ(ウルトラ・マリン)を加えた色を乗せています。そして最後にマダー・レーキを何回もグラッシーしています。

このように、陰影の部分は、より複雑な色彩を感じるがために、その表現にいろいろな手段を使ってきたのです。

### ■インプリミトゥーラ (有色下地)

前回、この利点を記しましたが、その他に、この混色効果もあげられるのです。

下地が白であることは、色彩がより鮮やかに、明るく表現されるのですが、陰影部分には、固有色

以外に含まれる、他の吸収された光の色は、追加されなければなりません。

たとえば、風景の緑を描く時、木陰の部分には、補色である茶色などの暖色を塗らない限り、木陰の深い色彩は表現されないので、**ところが有色下地にした場合、すでに固有色以外の色が塗られているため、直接その物自体の色を塗るだけで、深い味わいを作る事ができてしまいます。**

どんな色を有色下地に使うかは、時々で異なりますが、一般的には、安定した顔料で、最終的な画面の調子で決定します。昔から使われてきたのは、土性酸化物、すなわち、オーカー、シエンナ、アンバー(各々、ロー又はバーント)および、緑土などです。もちろん現在は、化学的に合成した、より安定した顔料もありますので、これらに限るということはありません。リューベンスは、シエンナを基本にしたグレイ調子の色をわざとムラに塗った下地にてあります。

モチーフ写真



デッサン（白無地にシルバー・ポイント）、F6号



水彩によるスケッチ（紙に透明水彩、3号大）

■カトレアのある  
静物を描く

今回は、カトレアをモチーフに選びました。ほかに、色彩の対比にレモン、質感の対比にガラス器と胡桃を置いてみました。パネルはF6号を使います。

絵は基本的に、「対比」で成り立っています。質感、色彩、明暗、遠近、粗密、マチエールなど、いろいろな要素で対比させることで、主張が明確に表現されます。

- 1 切花は持ちがよくありませんので、しっかりとデッサンしておきます。この例ではシルバー・ポイント（銀筆）で描いています。シルバー・ポイントというのは、鉛筆が一般的に用いられる以前によく使われた、銀を先端につけたニードルです（注）。色見本のために、水彩でも描いておきました。
- 2 これをもとに、パネルに転写し、墨入れをしてから、今回はロー・シエンナの有色下地にします。（制作過程1、2）

3 テンペラ白で浮き出しを行います。背景は壁にしますが、マチエールの変化が欲しいので、紙を使ってスタンピングを試みました。（制作過程3、3b）

（注）シルバー・ポイントについて、後に改めて説明します。





制作過程 3 a : テンペラ白による浮き出し。



制作過程 1 : アンダー・ドロウイング。  
デッサンをトレーシング・ペーパーに写し、裏に油絵具ライト・レッドを塗り付け、パネルに重ねてなぞる。さらに墨で描く。



制作過程 3 b : 背景部はくしゃくしゃにした紙でスタンピングをし、マチエールの変化をつける。



制作過程 2 : アイソレーション (食い込み止め) とインプリミトゥーラ (有色下地)。  
油絵具ロー・シェンナを油メディウムで溶き、テレピンで2倍に希釈したものを塗布。

## 《今回の処方》

### 1 パネル

- 和紙を貼ったシナベニヤのパネル (貼り方は2月号参照)

### 2 地塗り塗料

- 硫酸カルシウム (石膏)

- 水 1000 cc に対し、トタン膠 70 g の膠水

- ※ 膠水に、ひたひたまで石膏を振り入れる。

- これを、縦横交互に6度塗りする。

- ※ 画材店で石膏というとき、「焼き石膏」になる。薬局で入手するか、天然石膏と言って購入する。

### 3 テンペラメディウム

- 全卵 1 容量に対し、ダンマル樹脂溶液 (ダンマル 100 g にテレピン 200 cc) 1 容量

### 4 油メディウム

- スタンド・リンシード・オイル 1 容量
- ダンマル溶液 (ダンマル 100 g にテレピン 400 cc) 1 容量
- テレピン 2 容量